

「酔いどれジャワ人(1)」(2020年12月28日)

インドネシア語の minum はジャワ語のゴコ ngoko でゴンベ ngombe という。クロモはまた違う言葉だ。このゴンベという言葉に「酒を飲む」という暗意をしみ込ませたのがオランダ人だったらしい。日本語の「飲む」と同様に、明意は「飲む」だけであり、時と場合によって暗意の「酒を飲む」が使われる。「残業が終わったら飲みに行こう。」は暗意で使われる用法ということだ。

ジャワ人が酒を飲むという意味でゴンベという言葉を使うようになったのはVOC時代以来だそうだ。VOCはヌサンタラの諸王国を服属させたとき、レップを宮廷に入れて王家一族の手綱を握り、表面は和気あいあい、その裏では支配被支配のせめぎ合いという外交を行った。

ラフルズは History of Java の中で、ジャワ島プリブミにワインの飲酒を教えたのはオランダ人だったと書いている。かれはVOC崩壊後のジャワ島で、プリブミが洋酒を飲んでいる姿をたっぷりと観察したにちがいあるまい。

宮廷で結婚式やパーティがあれば、オランダ人高官も寿ぎを述べにやってくる。楽しかるべき宴に酒がないのをオランダ人が我慢できようはずもない。多分、招待主が西洋客人のために用意したのが始まりだったのだろうが、プリブミ貴族層が飲酒の習慣に倣うのは時間の問題だったようだ。

もちろん、ジャワ人上流層だけでなく中流層も、もっと小規模ではあれ、似たようなことをしたらしい。プリブミが直属の西洋人上司をスラムタンに招く。高位の西洋人がやってくれば、スラムタン主催者には大きな誉れになる。だから、主催者は上司を最大限もてなそうとするに決まっている。いまだかつて手にしたことのない洋酒を客人に提供して当たり前だろう。

そのようなVIPゲストのための洋酒が、そのうちにVIPゲストのいない宴でステータスシンボルになっていった。プリブミだけの集いであるにも関わらず、社会階層・モダニズム・プライアのプライドなどを飾るためにひとびとは洋酒を使うようになる。

ヨーロッパ産の輸入酒がプライドの源泉になってしかるべきように思われるのだが、現実はそうではなかった。末端庶民層が飲んでいるアルコール飲料も上流層のプライドの発露たる場に招かれるようになっていったのである。うるち米・モチ米・ニンニク・黒コショウ・トウガラシを混ぜて作るバデツ badek やブロム brom のステータスが上昇した。

上流層の行為は下流層のお手本である。ジャワ島では、社会階層や経済力と無関係にゴンベの習慣が広まって行った。祝い事ならその理由、うっ憤を晴らしたいならその理由、飲みたいから理由を付けて飲み、酔っぱらうのである。

何を飲むかは、懐具合・社会的地位・名目が何であるか、といったことで決まった。古い文学の中にも、ゴンベに関する記載が顔を出す。倫理問題から飲酒で得られる快樂まで種々の内容が取りざたされている。ゴンベというのは単に体内に飲み物を入れるということではないのだ。封建制度とコロニアル制度が溶け合った、伝統とモダンの融合する文化に根差す儀式と作法が存在したのである。

宮廷で、都市で、村落部で、ゴンベは続けられた。ヨーロッパ人への敬意を代表していたゴンベはアイデンティティ・経済・政治・文化の自己表現という帰結を持つ習慣に確信を持って移行して行った。

ギヤンティ協定という重要な歴史事件でさえも、オランダ人植民地高官とジャワ人支配者の間で乾杯の儀式が行われている。それに続いて、結婚式や昇進を祝う祝宴やパーティが続々と催された。[続く]

「酔いどれジャワ人(2)」(2020年12月29日)

ソロの著名な文学者パッモスサストロ Ki Padmasusastra は20世紀初めに作法 Tata Cara なる書物の中で、ジャワにおける飲酒の意味をエカパツマサリ eka padma sari に始まってダサブタマティ dasa buta mati に終わる十段階に分析した。一杯だけ飲むひとは、ハチが花々の蜜を吸うようなものである。十杯飲むひとは死人に似ている。飲む量の低レベルから高レベルまでの各段階について、かれは飲む人間のプロフィールとリスクを説いた。

パッモスサストロのその論はプリアイ層の祝宴におけるゴンベのありさまを描写したものである。集まった賓客がガムランの奏度を聞きながらおしゃべりしているとき、飲み物が供されなければならない。ゴンベは参会者への表敬であると同時に、参会者間の親密を高めるものであり、そして祝宴開催者の繁栄を示すものなのである。パッモスサストロはゴンベを、酔っぱらって恥ずべきことがらを招かないかぎりにおいて持つことの認められる快樂への権利であると位置付けた。

ラデン・マス・リヤ・ジャヤディニンラー世 Raden Mas Rija Djajadiningrat I の作品である Suluk Mas Nganten にもゴンベが登場する。その書はジャワ民族が開明時代に入った時代の社会文化的記録なのだ。そこには、結婚式の祝宴に客としてやってきたプリアイ層の姿が当時の世相として描かれている。

客人は飲み物を茶、ブランディ branduwin(オランダ語 Brandewijn)、ワインの中から選択する。来客を愉しませるために招待主は邸宅のプンドポ pendapa でタユブ tayub の歌舞を上演させる。ゴンベのありさまと、プンドポに上がって踊る客たちの姿がそこに描き出されている。

ゴンベはプリアイ層のステータスと祝宴のクオリティを高めるものだった。こうしてジャワではあらゆる祝宴にゴンベが取り入れられるようになっていった。1924年にヤサウイダッダ R Tg Jasawidagda が発表した古典小説 Kirti Njunjung Drajat にも、20世紀初期にクラテンで開かれた結婚式の一場面としてゴンベが描かれている。その結婚式にはオランダ人植民地高官とプリブミ高官が登場するのだ。

かれら高官たちをもてなすためにジン jenewer が振舞われる。かれらには喜んで新郎新婦と招待主に祝福を与えてもらわなければならない。敬意を表するのに手落ちがあって、かれらを不快にしてはたいへんなことになる。だから、かれらにだけジンが振舞われて、他の一般参会者には出されない。ジンが社会階層をシンボライズするものとして使われているのである。

ゴンベは社会的権威を持つオランダ人植民地支配者とプリブミ封建支配者のステータスを確認するものとして、エリート階層になくてはならないものになった。プリブミ封建支配層がみんな非ムスリムだったなどと考える必要はないのである。

いくら西洋人が飲酒をライフスタイルにしているとはいえ、酒に呑まれる人間に事欠かない実態は歴史が示している通りだ。ヌサンタラにやってきたオランダ人たちも、VOC時代以来、多数の者が酔いどれになって悲惨な生涯を終えている。KNIL兵舎の中に酔いどれが目立ったが、市民社会の中にも少なからずいたようだ。

植民地政庁は身内である西洋人社会に過度の飲酒を戒める宿題を常に負わされていたというのに、倫理政策が始まるとその対象をプリブミにまで広げなければならなくなった。ジャワ人のゴンベが目に残るものになっていたにちがいない。

こうして1920年に飲酒に関する啓蒙の書物が世に出された。厚さ203ページにわたる Het Alcoholkwaad en Zijn Bestrijding と題する書籍で、植民地政庁高官であるオランダ人カツ J Kats が著述した。ムラユ語のタイトルは Bahaja Minoeman Keras serta Daja Upaja Mendjaoehinja: Teroetama bagi Hindia Belanda となっている。

この書は人間にとっての飲酒の益と害を知らせるために書かれたものであり、行政高官・行政職員・青年層・すべての住民がこの内容を知っているべきである、とカツはその前書きの中で述べている。要は、いくつかの効用があるとはいえ、酒は害毒の方が多いのだということをカツは主張したので

ある。[続く]

「酔いどれジャワ人(3)」(2020年12月30日)

飲酒常習者は身体の抵抗力が衰えるために病気にかかりやすいというような、ヨーロッパ諸国で公表されているアルコール飲料のネガティブな影響をかれはたくさん引用した。1899年のフランスでは、病院で治療を受けている患者の30%がアル中であり、同じ年のイギリスでは軍隊構成員の10%が酔いどれであり、肉体的に虚弱な兵隊という矛盾を抱えている。またドイツでは精神病院患者のほぼ四人にひとりが飲酒によってそうなったのだ、といった統計が紹介されている。

この書物がプリブミをも対象にしていることから、カッツはプリブミのエリートや社会組織の禁酒に対する賛同を盛り込むことはたいへん有意義であると考えた。サレカツイスラム Sarekat Islam が1915年に行った決議の中の「政府はプリブミに対して禁酒法を定めよ」という要求や、ヨグヤカルタのモハマディヤが表明した「アヘンで行っているようにアルコール飲料も政府の直接販売制にせよ」という要請、またブディウトモが提言した「政府はアルコール飲料の販売場所を制限し、同時に高い物品税をかけて高価なものにせよ」という希望などもその書物の中に引用された。

ブディウトモは更に一般庶民に対して、地域行政の指導者を選ぶ場合には住民のお手本になるように、飲酒に無縁の人物を選ぶべきであるという呼びかけも行っている。

この書物とは別の情報源によれば、1918年に植民地政庁は東インド社会における飲酒の弊害を撲滅する任務を負うコミッション Alcoholbes Trijdings Commissie を設立している。面白いのは、そのコミッションのトップにプリブミが据えられたことである。クスモ・ユド PTA Koesoemo Joedo ポノロゴ県令 Bupati Ponorogo がコミッション長官に就任した。この一事から、プリブミに対する減酒・廃酒の奨励がいかにかい大きいウエイトを占めていたかということが推察できるように思われる。メンバーには警察・プリヤイ・宣教師・軍人・社会組織などから代表者が集まった。

コミッションの報告書には、飲酒の習慣が東インド社会に広範に広まっていることが述べられている。バタヴィアを例に取るなら、「アルコール飲料の製造・販売・消費のすべてが危惧すべき段階に達して、スネン地区はアルコール飲料販売のセンターであるとささやかかれており、赤線(売春)地区も同様で、アルコール臭芬々たる喧嘩出入りの舞台になっている。」と1922年のコミッション報告書に記さ

れている。

アルコール飲料撲滅作戦はジャワ島のいくつかの地方で実施された。そのメインターゲットはプリブミ社会の中底辺層で一般的な伝統的アルコール飲料であるバデツ badeg、チウ ciu などであり、行政の製造販売許認可など得ていないのが一般であることから、警察はそれらを闇(無許可)物品と位置付けた。

そして1920～25年に行われた闇アルコール飲料撲滅作戦は、大掛かりな一大作戦として進められた。その地方の行政官はもちろん作戦に巻き込まれたが、時によってはルラ(町長)やチャマツ(郡長)ばかりかウダナ Wedana まで担ぎ出されている。住民をスパイにし、密造人を見つけたら賞金が与えられる方式にしたために、賞金欲しさにタペシンコン tape singkong を作っている者をアラツ arak 密造者だと言ってタレこむようなことも起こった。マディウン、ゴンボン、スラカルタのブコナン地区などでそんな騒ぎが起こっている。

タペシンコンはもちろんアルコールを含有しているものの、行政はそんなものを取り締まろうとしているのではない。だが賞金に目がくらんだ村のスパイたちは往々にして、籠に入れたタペシンコンを売り歩いている行商の老若のお姉さんたちと悶着を起こした。

一方、コミッション自身もバタヴィアの警察捜査官に不満を鳴らした。植民地警察は多数の退役オランダ人兵士を捜査官にしており、闇アルコール飲料取締りのために捜査官を薄暗い地区に投入していたが、かれらはほとんど成果らしい成果を出さない職務に不熱心な者たちだとコミッションは非難した。

都市部の二等三等地区にある場末のカフェで行われている闇酒販売の大掃除が期待されているというのに、捜査官が担当地区を回っているうちに店主や客たちと仲良くなり、手も足も出せない状況にはまっていくのだというコメントも報告書に述べられている。

店を覗くたびに店主から特別待遇を受ければ、たとえ収賄などしていなくとも人情が肥大化する。小さいことは見て見ぬふり、というのがその「人情」の中にある。オランダ人でなくプリブミ捜査官ならなおさらのことだ。店主・闇酒卸人・客たちと対決するには、プリブミはもっとさまざまなしがらみの中にかからめとられている。こうして安泰確保の努力が続けられているはけ口に、増加する一方の闇酒生産がとうとうと流れ込んで行くのであった。[続く]

「酔いどれジャワ人(終)」(2020年12月31日)

撲滅作戦は、失敗とは言えないまでも、たいして成果のない結末を迎えた。その原因の第一要因が、ヌサンタラのプリブミ住民にとって飲酒があまりにも古くからの伝統になっていたことだったと見るのは間違っていないだろう。マジヤパヒツ王国黄金期に書かれたナガラクルタガマを読めば、その時代に王宮で開かれた宴が常に飲酒で彩られていたことがよく分かる。

収穫明けの祝祭はいつも、王がタンポ tampo を振舞って幕開けの合図にすることになっていた。タンポとは最上のコメで作った強いアラッだ。オランダ人がヌサンタラに住み着いて以来、悪徳高官はもとよりたいていのオランダ人高官がヨーロッパ製の洋酒をヌサンタラに輸入することで公私の懐を豊かにしていくビジネスに関心を注いだ。洋酒のメインはブランディとジンだった。何千フルデンもの酒税が毎年政府の金庫を潤したことは植民地政庁の財務報告書が物語っている。悪徳高官もそれに負けじと自分の金庫を潤したのである。

つまり大昔からヌサンタラはアルコールの匂いが空気の中に染みついており、オランダ人がそれに輪をかけて洋酒をそこに注ぎ込み、ハラムの声もものかわと、権力の甘き香りを楽しもうとする階層が自己証明に使ったのを見習って末端階層までがそれを真似た結果、飲酒撲滅を言い出したころには天から地までがアルコール漬けになっていたというのがヌサンタラの飲酒状況だったようだ。

何しろ、飲酒撲滅の掛け声は植民地政庁と公的洋酒輸入販売ビジネス業界が、商売がたきであるアラッなどの伝統的地酒に大打撃を与えようとして目論んだヤラセだったという見解もあるくらいだ。地酒は公的なものであれば許認可で行政がいくらでもコントロールできる。闇酒が公的輸入アルコール飲料の真の商売がたきなのである。だから闇という名前をつけて非合法性と非倫理性を謳いあげ、それを撲滅することで行政とそれに与する業界が大儲けするというシナリオが描かれる。この構図は一世紀過ぎた今日でも、まったく同じ状況が継続しているように見える。加えて汚職国家では、政府を儲けさせれば自分の懐が潤う個人であふれているではないか。

1905年、カイロ在住のオランダ人実業家ファン・フローテン Th F van Vloten は東インド植民地政庁財務部に対してアラッの国家専売制を提案し、スピリトゥス spiritus (変性アルコール) 製造工場を建設したいという問い合わせをかけた。

財務部が教育宗教産業部に意見を問うと、産業部長は否定的な返事をした。政庁はスピリトゥス製造産業と関わる気はない、という返事だ。スピリトゥスは燃料用物資だが、東インドにおけるスピリトゥスの需要はせいぜい照明用のペトロマックランプに使われる程度で、燃料としては木材や石油がきわめて廉価に手に入るため、スピリトゥスの需要があるとは思えないと言うのである。

そもそも教育宗教産業部というのはプリブミの工業や工芸を産業という言葉の焦点に置いている部門であり、モダン工場による大規模生産はお門違いの話だから、否定的な姿勢を示すのも無理ないと

ころだったわけだが、ともあれ財務部にもアラツ製造を国家事業にする気はなく、専売制の提案は拒否されている。

それが拒否されても、スピリトゥスの工場はスラバヤに建設された。蘭領東インドスピリトゥス会社 Nederlandsch-Indische Spiritus Maatschappij が操業を開始し、スピリトゥスだけでなくアラツも生産した。

プリブミの小規模で時代遅れの製法を使うアラツ生産がNISMIには目の上のタンコブだったようで、スピリトゥスや蒸留酒のようなモダン蒸留技術を駆使する生産は高品質でコストもかかるものであり、プリブミが行っているようなものはすべて無くして大型でモダンな製造工場に集中させるべきだ、という論をかれらは機会あるごとに主張した。[完]